様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２９ 日現在

機関番号：４２６７６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ０２８４７

研究課題名（和文）自律的な積み上げ学習につながる授業内・外学習時のメタ認識出現条件

研究課題名（英文）Conditions Observed Metacognitive Behaviors lead to Autonomous Learning during in-class and out-of-class Learning

研究代表者
中尾　桂子（NAKAO, KEIKO）

大妻女子大学短期大学部・国文科・教授

研究者番号：２０４１９４８５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：　自律的な学習を進めるためには、どのような学習環境を設けることが望ましいのかを考えるために、学習者自身が、授業内の協働的活動、授業外での課題への取り組みで、自身の学習の状況を記述して振り返る機会を設けた。
　その振り返りの記述の中に見られる、自身の学習についての言動や行動、予定、指針などを客観的に書いた「メタ認知」的言動を観察した結果、改めて、学習に対するメタ認知の活性化には、他者と自己と課題とに向き合うことが、自身の目的の何にどのように有益だと、学習者自身が捉えているかが重要であると考えられた。ただ、個人の性格特性や、自身の学習目的の継続的保持の影響もあり、そのための支援も必要だと考えられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究は、いわば、学習者主体の自律的な学習理論が、個別の実践でも確認できるかを実地検証したものと位置付けられる。日々の実践の繰り返しの中で、学習者自身が学習を客観視する視点（メタ認知）を活性化させるよう努めることで、学習動機がある学習者も、学習動機が乏しい学習者も、学習に対するメタ認識的な視点の確立につながること、さらに、学習者自身とその仲間、課題と自身の関係を意識する機会を多く与えることが、重要だと確認された。
　また、一貫してメタ認知という観点で学習を客観視させることに努めるには、教師の教育理念の保持が重要であったが、理念の保持に大きな意味がある点が確認できた意義も一教員にとっては大きい。

研究成果の概要（英文）：　In order to consider what kind of learning environment is desirable to promote autonomous learning, the learners themselves were given opportunities to explain their own learning situations and to reflect on their own learning as they engaged in collaborative activities in class and in assignments outside of class.
　As a result, it became clear that in order to activate the metacognition of learning, it is important how learners themselves recognize the usefulness of facing others, themselves, and their tasks from the perspective of their own purpose.
　However, it was also considered that individual personality traits and the retention of one's own learning goals would also have an impact, and that teacher support would be necessary for this achieve.

研究分野：教育工学

キーワード：メタ認識　授業内・外学習　自律学習　学習支援

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究の当初の目的は、機械的な積み上げ学習の自律的な継続を困難とする学習者の支援方法を探ることにあった。

まず、自律学習の動機には学習者オートノミーが影響する[1]が、その活性化には学習者自身の学習に対するメタ認識が必須要件となる。そのため、学習プロセスを観察し、このメタ認識出現条件を特定することで、メタ認識活性化モデルの実践的検証や自律化への支援方法の検討に応用したいと考えた。

学習は、授業でも行われるが、学習者の中での学習を考える場合には、授業外での学習との関係で、授業内の学習を捉える必要がある。そのため、授業内・外の学習において、メタ的な学習把握や自身の行動に対するメタ的な認識を促す効果が高い活動、課題の出し方とはどのようなものかを検討したかった。また、物理的な学習と、意識的な学びの関係を明らかにすることが可能かについても検討したかった。それは、授業内外の学習の関連性とそれに対する学習者の意識に基づいて、学習支援の 2 つの流れを融合する学習モデルを検討したいと考えたことによる。

一般に、学習支援においては、従来からの機械的な積み上げ学習のためのドリルを発展させた物理的な学習促進を動機づける教材作成を進める立場と、学習者オートノミー[2]の活性化により、メタ認識に支えられた内的活動[1]にもとづいて自律学習につないでいこうとする意識変換の指導を検討する立場がある[5][6]。

もちろん、機械的な学習の成果が内的活動に影響する可能性もあり、その逆もあり得るが、物理的支援となるドリルも、学習者主体の自律学習という観点から見れば、メタ認知の中で学習者が自主的に使うものとして位置づけられるものと考えられる。確かに、機械的な積み上げ学習のためのドリルは、学習者のニーズに基づき、また、情報科学の発展で、より高度に学習を支援する学習支援システムが提案されている。それでも、支援の活用は、学習者に委ねられる部分が大きく、また、そこでの学習は、授業に関連した個人の学習とは、切り離されて存在している。

また、内的学習支援も、自律学習のモデルの中で行なわれるべきである。学習ポートフォリオによる課題管理を通して、学習者のメタ認識を活性化しようとする支援が一般化してきたものの、こちらも、物理的支援同様、日々の授業活動における学びの内的活動とは切り離された形で存在するものが多く、十分にその本来の目的に応じた活用がなされているとは考えられない部分もあるのではないか。

以上のような現状を踏まえて、中尾・森下（2016）は、機械的な学習の継続を目的とする学習環境作りと継続の簡便性に、自律化への意識に働きかける支援という観点を盛り込み、物理的支援と、内的活動活性化支援を融合させた学習支援を模索した[7]。具体的には、授業外の機械的な学習と授業内学習での内的活動活性化の連携を「見守り」漢字学習としてデザインしてみたのだが、その実測的観察は十分ではなかった。

また、自律学習につながる内的な学習促進のしかけとして「記述式内省活動」と「記述式内省ルーブリック」を原田他（2019）と開発し、短期大学部のアカデミック・ライティングのクラスで実践して、受講者 12 名の意識調査から有効性を検討したが、内的活動と授業内・外学習とのつながりについては十分な観察ができていなかった[8]。

授業内･外学習のプロセスを観察して､メタ認識を促す効果が高い活動､課題の出し方を調べ､追認可能で明確なデータを元に、理論と実践とをつなぐ形で、物理的な学習と、意識的な学びの関係を明らかにする研究が望まれた。それには、汎用性を考え、まず、自律的な積み上げ学習につながる授業内・外学習時のメタ認識出現条件を明らかにする必要があると考えた。

そこで、本研究の開始当初、国内と国外の授業での観察を計画した。まず、国外であるが、1 つ、授業内外の個人の学習と学習者の意識を調査するのに、より環境的影響を受けにくいことを考え、授業以外に日常生活で自然に学ぶ環境にはない海外での日本語学習者の観察協力をスペインの 2 つの大学での中級日本語クラスの担当者に依頼した。そこでは、中尾・森下（2016）の＜「見守り」漢字学習＞を用いて、日本語の語彙、漢字学習において、授業内・外の物理的なドリル学習が、学習者の内的な学びにどのようなつながりが見られるかを、ドリル学習の成果と授業内の発言数、協働学習での知識の活用の様子、内省シートを用いた振り返りと自己評価の内容に基づいて調査し、授業内･外学習を通した成果と意識とが学習のメタ的な認知活性化に影響しているかを観察する予定であった。

また、もう 1 つ、国内では、いくつかの学習内容の異なる授業において、機械的なドリルに基づく知識強化用の課題と、授業内の発言数、発言内容との関連、また、内省シートを用いた振り返りと自己評価の内容に基づいたメタ認知活性化の状況を観察することを計画した。国内で観察の協力を依頼した授業は、日本人対象のアカデミック・ライティング、現代日本語文法、楽器練習、韓国語初級・中級、小学校の英語学習であった。

以上のように考えた当初の計画では、学習パラダイム転換後の教育実践の場を牽引する OECD・DeSeCo のキー・コンピテンシー[1]と自律学習理論[2-4]に基づく、メタ認識に影響し得る観点の具体的な実測値を 4 機関の授業から見出す試みであると位置づけられた。さらに、実測的観察に基づく、学習支援の物理的、内的活動の連携方法を明示的な観点と尺度で明らかに

するものでもあった。いわば、学習者主体の自律的な学習理論の実地検証でもあり、より汎用性の高い検証につながる先駆的な検証が期待できる研究だと考えられた。

しかし、 研究開始後、観察対象を限定して計画を実行する段階となった 2020 年度前期の授業形態が、Covid-19 の影響による社会的変化によって、大きく変容した。大学の授業自体の閉講、開講延期、開講後の授業形態のオンライン化のいずれになるか、決定に時間がかかったことから、学習の環境が二転三転する中で、授業そのものの概念が根本的に覆り、授業内・授業外の学習と授業外学習システムと連動させた授業実践の機会がなくなった。

調査への協力を依頼していた授業の開講状況が変わり、予定していた対象者の観察が継続できなくなったこともあり、授業観察の観点と分析観点を再検討して、本科研の分析を、授業実践の中での学習後の内省分析を中心に据えて、学習目標に対する学習者の意識、ならびに、学習者の学習上のメタ認識の形成、その時期、条件を考察することを中心にすることに変更した。

[1] ライチェン、ドミニクS. サルガニク、ローラH（編）（2006）『キー・コンピテンシー 国際標準の学力をめざして』（立田慶裕監訳）明石書店.

[2] 青木直子(2005)「自律学習」日本語教育学会(編)『新版日本語教育事典』大修館書店、pp. 773‐775

[3] 丸野俊一(2008)「心を司る「内なる目」としてのメタ認知」『現 代のエスフリ「内なる目」としてのメタ認知』No.497、 p.5-17.

[4] Holec. H.(1981). Autonomy in Foreign Language Learning. Oxford: Pergamon.

[5] 尾関史（2007）「学習者の主体性を活かした授業に向けて―学習者と教師の視点から捉える学習者主体」『早稲田大学日本語教育実践研究』6、185-193.

[6] 今井（2014）「学習者のストラテジーから見る自律性の考察―研究ノート―」『玉川大学文学部紀要』40、241−248.

[7] 中尾桂子・森下淳也（2016）「日本語学習者のための副教材用漢字練習アプリ作成キットの開発」『人文科学とコンピュータシンポジウム論文集 2016』情報処理学会シンポジウムシリーズ ISSN 1344-0640, IPSJ Symposium Series Vol.2016, No.2, pp.45-50

[8] 原田三千代・淺津嘉之・田中信之・中尾桂子・福岡寿美子（2019）「アカデミック・ライティングにおける対話的評価活動の可能性」『小出記念日本語教育学会論集』27, pp.37-52.

２．研究の目的

観察対象を限定して、計画を実行する段階となった 2020 年度前期の授業形態は、Covid-19 の影響による社会的変化によって、大きく変容したことで、授業そのものの概念が根本的に覆った。その結果、授業実践の中での学習後の内省分析を中心に据えることで、学習目標に対する学習者の意識、ならびに、学習者の学習上のメタ認識の形成、その時期、条件を考察することを研究目的の中心にした。

実測的観察の部分は除外したが、学習に対する内省におけるメタ認知的言動の観察は、学習環境の整え方、課題への取り組み方における学習支援上の示唆の在り方を検討するものとして位置づけられることに変わりはない。

３．研究の方法

Covid-19 以前の本科研開始前である 2018 年度の実践と、その際の学習者の印象から、「自主性」、「客観視」、「見守り感覚」が意識できる環境整備がメタ認識活性化に効果的だと考えられたことで、引き続き、2019 年度の実践においても、授業終了後の「振り返り」の記述行為を、「自主性」、「客観視」、「見守り感覚」が意識できる環境下においた。そして、新たに、アカデミック・ライティングクラスで掲示板を利用する形で見守り意識にと自主性についての観察を始めた。

そこでは、＜成績に関係ない＞行為として、①漢字システム上での教師の＜見守り＞、または、②掲示板でのクラス全員の＜見守り＞を受ける状況を設け、自らの学習結果、プロセスへの＜内省記述＞を指示した。③そして、授業終了後のアンケートと協力者へのインタビューを通して学習目標に対する学習者の意識、ならびに、学習者の学習上のメタ認識の形成の様子を観察し、学習者自身が自分自身の学習の状況をどのように客観視しているか、メタ認知の活性化される授業実践上の条件を考察した。

４．研究成果

各年度の授業実践の中で、内省、印象に基づき、メタ認知の活性化が起こり得る実践上の条件を検討した。

R1（H30/2019）年度には、授業外の「見守り」学習の可能性、ならびに、メタ認知と学習の振り返り活動との関係について報告した。まず、「見守り」学習である。「見守り」学習とは、授業外で事前に予習・事後に復習できるように自習用サイトに公開しておき、学習者の実施状況に合わせて、授業担当者が次の授業内での活動の際に練習結果を授業で各学習者に使う場面を与えるという連携の取り方を考えた学習支援を指す。自習用サイトは、中尾・森下（2016）で開発した、練習用サイトを自動生成するプログラムから成るキット[7]を用いて作成したが、2019 年

度の報告では、東京在住の定住者用就労支援日本語クラスの受講者（2018 年度開講の夜間初級 3 カ月コース）から協力者を募り、応募した 4 名に、オンライン上のサイトで公開しておいた授業外学習用の漢字の読みの練習問題の使用と印象を質問紙で尋ねた。そして、その結果を「自己決定理論:SDT」(Deci&Ryan、1985、2002)に基づいて分析し、見守りによる安心感の元で自律的に「練習してきた」ことにより、クラスで「当たり前に」「読める」、「自然に」「読んで活動できる」という日常の関係性の中での成功体験を確認した。これは SDT で言う「心理的欲求」の 3 つの従属理論:「自律性」「関係性」「有能性」に相当すると考えられ、本学習設計は動機付けに有用な点が認められると考えられた[9]。

また、都内の短期大学部の 1 年次必修科目「アカデミック・ライティング」のクラスでの授業後の学生の振り返り、提出課題、学生の行動に、メタ認知的言動が見られるか調べたところ、学生が課題に取り組む中で、学んだと自覚する点が明確かどうかが、学習内容の完成度や、メタ認識促進に関連していると考えられたことから、メタ認知の活性化される条件の一つに、学習内容に取り組む姿勢と、学習に対する自覚的な内省とが関係し得ることを報告した[10]。

[9] 中尾桂子・森下淳也（2020）『動機づけの観点からの漢字「見守り」学習―漢字読解支援教材作成キットを用いた授業外学習設計の有用性―』EAJE ベオグラードシンポ論集 2019、1-24.

[10] 中尾桂子（2019）『自主的で焦点が明確な振り返りとメタ認知促進の関連性』日本リメディアル教育学会 第 8 回関東甲信支部会口頭発表.

R2（2020）年度は、2019 年度の実践[10]にて行った掲示板に自主的な内省の記述を分析し、その結果から、学習を振り返って内省を記述することで、各自が学習と自身の状況を自覚し、それにより、メタ認識と学習促進に有益な影響を与え得る可能性を報告した[11]。

掲示板に記述された学生毎の内省に、メタ認知的知識の 3 要素（三宮、2018）である、課題、方略、人（自身の特性）の客観視の 3 つの記述数がどの程度見られたかを見て（図 1）、さらに、その推移を見ていくと、15 回の授業中、自主的に、平均 6.6 回の内省が記述されており、授業開始時は、自身を客観視するメタ認知の記述が多いが、授業後半になると、方略に関するメタ認知的知識が増加していた。

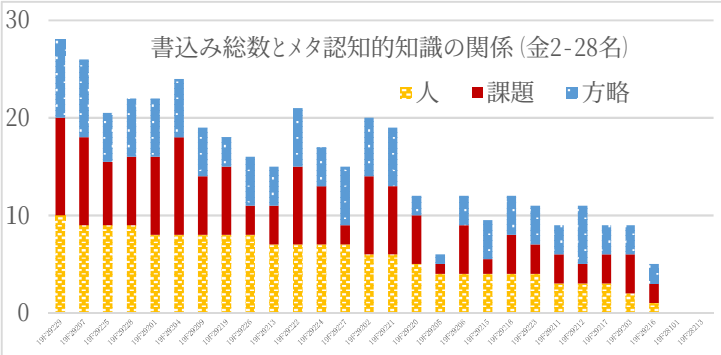

図 1　掲示板への書き込みにおけるメタ認知的知識の内訳

表 1　メタ認知的知識の書き込み数と成績との相関

金 2 クラス	UP 総数-成績	人-成績	課題-成績	方略-成績
成績評価点	.57	.55	.59	.63

また、表 1 にあるように、内省におけるメタ認知的要素と成績には中程度の相関が見られ、特に、自分自身や課題についての発見よりも、今後の行動等に応用できる可能性の高い方略的な認知に関する記述が見られることが、成績にも良い影響を与えている可能性が考えられた（表 1）。

掲示板という他の視線を意識する場所での内省の記述には、見守り、授業目標と到達点の具体的な理解、到達点への自身の到達度に対する批判的考察が見られることから、認知的活性化には、対人（他者・自己）への意識、課題への向き合い方といった意識が関係があると考えられた。

[11] 中尾桂子（2020）『掲示板を利用した「振り返り」の可能性：見守り、客観視、自主性とメタ認知の関係から』公益社団法人 私立大学情報教育協会「2020 年度ＩＣＴ利用による教育改善研究発表会」

R2（2020）年度は、Covid-19 の影響で、前年度 3 月から 5 月まで大学が閉鎖され、授業開始が完全オンラインで 5 月半ばからとなったことで、学習環境が大きく異なった。協力校や分担者の担当授業が閉講され、様々な混乱が見られたことから、状況を鑑みて、本科研の研究は、代表者の実践での観察のみで進めた。当初、メタ認識活性化条件として、見守り意識、客観視、自主性の活性条件をより詳細に検討する予定であったところを変更し、オンライン授業における「自主性」、「客観視」、「見守り感覚」が意識できる環境と要因を考察した[12]。

[12] 中尾桂子（2021）「意識調査からみる非対面授業の課題― 統一的導入、見守り感覚、メタ認知言語化の必要性―」JADE&UeLA 合同フォーラム口頭発表 2021.3.9（火）

R3（2021）年度も引き続き、オンライン授業が中心であったことから、オンラインでの実践において考察したが、非対面授業でも、個人の自主性やメタ認識の活性化には、課題に取り組む様子を見守る感覚があることが影響すると考えられた[13]。

[13] 中尾 桂子（2021）『主体性涵養のための学科連携にむけて―学生のパーソナリティ、学生の学習行動、教師の心象に基づく提案―』大学 e ラーニング協議会 UeLA & 日本リメディアル教育学会 JADE 合同フォーラム 2021 口頭発表 2022.3.8（火）

R4（2022）年度の実践分析の結果からは、学習に向き合った学生の場合、課題と他者と自分自身に向き合う活動を積み重ねることで相互に尊重し合う環境が生まれ、そして、意見を言語化して述べあう討論の意義を意識することと、討論参加の回数を経て力が備わっていく自覚が、メタ認知活性化に影響し得ることが観察された[14]。

また、学習に向き合えない学生の問題点の観察からも、学習に対するメタ認識的な視点の確立には、学習者自身とその仲間、課題と自身の関係を意識する機会の多さが重要になる可能性が考えられた[15]。

これらの結果から、学習における自身の問題や達成度を自覚することが、メタ認知の活性化には重要であり、内省といった振り返りを定期的に行うことで、その自覚が強化され得ると考えられる。それは、より学習意欲の高い学習者だけではなく、学習に向き合えない問題のある学生においても同様であると考えられる。また、学習に向き合えない傾向の学生には、性格を考え合わせたうえで、協働的な学習に参加すること、またその活動を通して、内省による自覚を強化することが重要ではないかと考えられた。

[14] 中尾 桂子（2022）『対話的協働活動における内省シートから見た「学習」に対する意識』日本リメディアル教育学会第 17 回全国大会口頭発表

[15] 中尾桂子（2022）『オンライン授業下での学習動機と授業・教室に対するイメージ―2020 年度入学、2021 年度入学の短期大学生への意識調査から―』大妻女子大学紀要―文系―54、1-24.

R4（2022）年度には、外国語の授業が対面で実施されるようになったことから、2019 年度に行った授業内外の連携を念頭に置いた授業デザインでの実践を、韓国語学習のクラスに応用して追認した[16]。

[16] 中尾 桂子（2022）『授業外学習用Ｗｅｂサイトの利用を通して見た学習に対する意識：韓国語 3 の授業から』2022 年度公益社団法人私立大学情報教育協会 教育イノベーション大会口頭発表

R5（2023）年度は、2022 年度の実践から、メタ認知活性化という観点には、討論の練習量と性格特性の影響を考える必要があると考えられたことから、協働と内省が各自の達成状況にどうかかわるかを考える必要があるとして、討論の練習をより丁寧に行ってみた。そのために、知識を反転授業形式で提示し、何度も見直せるようにしたことで、空いた時間に、課題の最終提出前のフィードバックの回数も増やし、修正箇所について個別に質問等を確認する時間を設け、さらに、討論練習のためにテキストを用いることにした。その結果、協働的な討論を通した課題の見直しというピア・レスポンスの活動意義に対する意識が高まり、また、協働的な討論と課題の質的向上の自覚により、協働的討論と内省の重要性を指摘する学生が増えた。このことから、あらためて、何が「討論」かを理解したうえでの協働であることが重要であること、さらに、討論練習量とその質が担保されれば、対課題、対自己、対他者に向き合う姿勢につながることが確認された[18]。すなわち、質の良い討論練習量が協働学習とメタ認知の活性化に影響すると考えられたのであるが、ただし、目的意識や、性格特性から周囲の学生の影響を受けやすい場合には注視する必要も見られた。したがって、学生の性格特性を早い段階で見極めて、目標意識を明確にするような機会を折々に行い、質の良い討論練習を行ってメタ認識の活性化に配慮する必要も重要になると考えられた[17]。

[17] 中尾桂子（2023）『メタ認知活性化における討論練習量と性格特性の影響の可能性ー2022 年度の実践からー』第 11 回 関東･甲信支部大会発表予稿集、日本リメディアル教育学会 関東・甲信支部大会口頭発表

[18] 中尾桂子（2023）『対話的協働活動の内省に見られるメタ認知的言動』大妻女子大学紀要．文系 55、140-128.

以上の実践研究を通して、学習に対するメタ認識の活性化には、改めて、他者と自己と課題とに向き合うことがどのように有益だと学習者自身が捉えているかが重要であると考えられた。そして、これら 3 つに向き合う条件が整えられない学生の場合、性格特性や、自身の取り組み理由の保持が、その意欲に影響する可能性があると考えられることから、場合によっては、学習への向き合い方について学習者と話す機会を設けるといった授業外からの支援も自律的な学習の継続に影響する可能性が考えられた。本研究の成果である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計11件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　9件）

１．著者名 中尾桂子	４．巻 55
２．論文標題 対話的協働活動の内省に見られるメタ認知的言動	５．発行年 2023年
３．雑誌名 大妻女子大学紀要―文系―	６．最初と最後の頁 140-128
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 中尾桂子	４．巻 54
２．論文標題 オンライン授業下での学習動機と授業・教室に対するイメージ―2020 年度入学，2021 年度入学の短期大学生への意識調査から―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 大妻女子大学紀要―文系―	６．最初と最後の頁 146-123
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 中尾桂子	４．巻 53
２．論文標題 掲示板を利用した「振り返り」によるメタ認知の活性化	５．発行年 2021年
３．雑誌名 大妻女子大学紀要―文系―	６．最初と最後の頁 102-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 川井一枝・栄利滋人・鈴木渉	４．巻 21
２．論文標題 小学生にとってチャンツは難しいのか？―発音と発話数の変化に焦点をあてて―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 JES Journal（小学校英語教育学会紀要）	６．最初と最後の頁 pp．20-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 中尾桂子	4．巻 52
2．論文標題 「発問」に基づく授業デザインと振り返りの試み：改訂版タキソノミーを援用した教師のためのCan-doリストの開発にむけて	5．発行年 2020年
3．雑誌名 大妻女子大学紀要―文系―	6．最初と最後の頁 146-131
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 ―

1．著者名 中尾桂子	4．巻 51
2．論文標題 文化的要素からみた授業分析-就労支援日本語クラスの教科書分析から-	5．発行年 2020年
3．雑誌名 大妻国文	6．最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 ―

1．著者名 中尾桂子・森下淳也	4．巻 2019
2．論文標題 動機づけの観点からの漢字「見守り」学習―漢字読解支援教材作成キットを用いた授業外学習設計の有用性―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 EAJE ベオグラードシンポ論集	6．最初と最後の頁 ―
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 ―

1．著者名 中尾桂子	4．巻 2019
2．論文標題 教師のための授業での文化的要素内省シートの開発―就労支援日本語クラスの教科書分析から―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 APJE シンポジウムアリカンテ大会論集	6．最初と最後の頁 39-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 ―

1．著者名 原田三千代・淺津嘉之・田中信之・中尾桂子・福岡寿美子	4．巻 27
2．論文標題 アカデミック・ライティングにおける対話的評価活動の可能性	5．発行年 2019年
3．雑誌名 小出記念日本語教育研究会論集	6．最初と最後の頁 37-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Chiharu Nakanishi, Hodaka Nakanishi, Kazue Kawai, Keiko Nakao	4．巻 201807Tokyo
2．論文標題 Teachers’ Reflective Practice Using the Revised Bloom’s Taxonomy	5．発行年 2018年
3．雑誌名 201807Tokyo Conference Proceedings-ASMSS & ICEPS	6．最初と最後の頁 260-262
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 中尾桂子・延恩株	4．巻 51
2．論文標題 「教師の意図」と授業デザイン可視化の試み―タキソノミーテーブルを用いた知識次元と認知プロセス次元による授業分析ー	5．発行年 2019年
3．雑誌名 大妻女子大学文系紀要	6．最初と最後の頁 11-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計13件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

1．発表者名 中尾桂子
2．発表標題 対話的協働活動におけるパーソナリティの影響力　（メタ認知的な自覚の影響力と比較して）
3．学会等名 日本リメディアル教育学会 第18回全国大会
4．発表年 2023年～2024年

１．発表者名 中尾桂子
２．発表標題 メタ認知活性化における討論練習量と性格特性の影響の可能性ー2022年度の実践からー
３．学会等名 日本リメディアル教育学会 第11回 関東･甲信支部大会
４．発表年 2022年～2023年

１．発表者名 中尾桂子・延恩株・ 森下淳也
２．発表標題 授業外学習用Ｗｅｂサイトの利用を通して見た学習に対する意識：韓国語３の授業から
３．学会等名 2022年度公益社団法人私立大学情報教育協会　教育イノベーション大会
４．発表年 2022年～2023年

１．発表者名 中尾桂子
２．発表標題 対話的協働活動における内省シートから見た「学習」に対する意識
３．学会等名 日本リメディアル教育学会 第17回全国大会
４．発表年 2022年～2023年

１．発表者名 中尾桂子
２．発表標題 主体性涵養のための学科連携にむけて－学生のパーソナリティ，学生の学習行動，教師の心象に基づく提案－
３．学会等名 大学e ラーニング協議会/日本リメディアル教育学会 合同フォーラム2021
４．発表年 2022年～2023年

１．発表者名 中尾桂子
２．発表標題 意識調査からみる非対面授業の課題－統一的導入、見守り感覚、メタ認知言語化の必要性－
３．学会等名 JADE（日本リメディアル教育学会）&UeLA（大学eラーニング協議会）合同フォーラム
４．発表年 2021年～2022年

１．発表者名 中尾桂子
２．発表標題 自主的で焦点が明確な振り返りとメタ認知促進の関連性
３．学会等名 日本リメディアル教育学会 第8回関東甲信支部会
４．発表年 2019年～2020年

１．発表者名 中西千春・川井一枝・中尾桂子
２．発表標題 タキソノミー・テーブルを活用した英語授業デザインワークショップ -ブルームの改訂版の教育目標-に基づいて-
３．学会等名 大学英語教育学会第58回国際大会（名古屋、2019.8.30）
４．発表年 2019年～2020年

１．発表者名 中尾桂子
２．発表標題 掲示板を利用した「振り返り」の可能性：見守り，客観視，自主性とメタ認知の関係から
３．学会等名 公益社団法人 私立大学情報教育協会「2020年度ＩＣＴ利用による教育改善研究発表会」
４．発表年 2020年～2021年

１．発表者名 中尾桂子・中西千春・川井一枝
２．発表標題 リメディアル教育としてのライティング指導における内省・応用・授業外学習について-学生の主体的な参加に向けて-
３．学会等名 日本リメディアル教育学会第7回関東甲信支部大会
４．発表年 2018年～2019年

１．発表者名 中尾桂子・中西千春・川井一枝
２．発表標題 リメディアル教育における「発問と教師の意図」についての考察-知識次元と認知プロセス次元の分析-
３．学会等名 日本リメディアル教育学会第14回全国大会
４．発表年 2018年～2019年

１．発表者名 中尾桂子・中西千春
２．発表標題 ブルームの改訂版を用いた教師のための発問デザインCan-doリストの開発
３．学会等名 日本語教育国際研究大会：ICJLE2018（国際学会）
４．発表年 2018年～2019年

１．発表者名 中尾桂子
２．発表標題 教師のための授業での文化的要素内省シートの開発―就労支援のための日本語クラスのシラバスと教案の分析から―
３．学会等名 第5回スペイン日本語教師会シンポジウム：APJE IV Simposio（国際学会）
４．発表年 2019年～2020年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	延　恩株 (YEONE UNJU) (00554742)	大妻女子大学・キャリア教育センター・准教授 (32604)	
研究分担者	森下　淳也 (MORISHITA JUN-YA) (20182230)	神戸大学・国際文化学研究科・名誉教授 (14501)	
研究分担者	中西　千春 (NAKANISHI CHIHARU) (30317101)	国立音楽大学・音楽学部・教授 (32611)	
研究分担者	川井　一枝 (KAWAI KAZUE) (40639043)	宮城大学・基盤教育群・教授 (21301)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関